７　新しい世の中　―明治・大正・昭和の津島―

（１）牛頭天王から津島神社へ

中世以来津島社はお天王様あるいは津島牛頭天王社と呼ばれ、牛頭天王をまつっていました。牛頭天王は、日本の風土から生まれた神であり、インドや中国、日本の神々の習合から生まれたものです。疫病退散の神。医学が不十分な時代に病気から身を守ることは切実な願いでした。そんな中、明治政府は、江戸時代までの神仏習合を改め、神道と仏教との分離を推し進める神仏分離令（1869 年）を出しました。津島牛頭天王社では、激しい廃仏毀釈運動（仏像を捨てたりこわしたりすること）はおきませんでしたが、神宮寺・鐘楼が取り払われ、仏教にかかわるものが境内からなくなりました。牛頭天王像も興禅寺（今市場町）に移されました。明治２年(1869)には、津島神社と名前を改め、建速須佐之男命をまつりました。今までの牛頭天王信仰はなくなりました。

神仏分離は「神様、仏様」の両者を敬い、お詣りする私たち日本人の江戸時代までの生活とは大きく違うものでした。

（２）尾張木綿

衣服の歴史を振り返ると、麻・綿・絹などが材料として使われてきました。地域により、また時代により違いがあります。尾張地方においても綿が中心であった地域と絹が中心であった地域とに分かれました。

（右・左）佐織縞の織物

江戸時代以降の海部・津島地域は綿（木綿）が中心でした。そのため、天保７年（1836）の『尾張名物見立番付』（尾張地方の名物についての番付）でも、「綿結城縞」（尾張木綿）が宮重大根、瀬戸物、有松絞、常滑焼、津島団扇、あかだと共に番付の上位に並んでいました。江戸時代の後半になると尾張藩では、大坂と同じように工場制手工業（マニュファクチュア）が発達しました。木綿や絹を織る機械と織り子を機部屋に集めて行いました。麩屋町の本蓮寺の門前には、門口１４・１５間（２５～２７メートル）の機部屋があったと言われています。

一宮・起・笠松でつくられた桟留縞・結城縞（美濃結城縞）などの高級な織物に対し、この辺りでは佐織縞とよばれる丈夫で洗濯に強い木綿がつくられました。

佐織縞は、延享年間（1744～1748）に甚目寺・新居屋の山田家で始まったと言われています。また江戸時代の終わり頃、海東郡佐折村（愛西市）で、結城縞にならって織り出したのが始まりとも言われています。いずれにしても幕末～明治の初めにかけて、尾張藩の応援もあり、農家の副業として盛んとなりました。農家の女性は地機とよばれる機織りの機械を借り受け、家で佐織縞を織ります。織った分、お金をもらうことができました。この賃機という内職により、佐織縞はたくさんつくられることになりました。

左　機織りと右　縞帳

尾張木綿の技術と織り子たちが、次の毛織物工業の発展の基になりました。

尾張藩は「佐織縞元締」を選び、仮会所（商品・材料を扱う場所）を米之座におきました。「津島組」「木田組」という世話方（役員）も決めました。佐織縞は他の木綿と比べると安く、もっぱら農作業用の服として利用されました。全国に向けて販売されましたが、特に東京と北海道・東北・九州などの農業の盛んな地域で売られました。

明治２６年（1893）には佐織縞木綿機業組合ができました。海東郡・海西郡・中島郡の尾張地方西南部の３つの郡で佐織縞を織る人たちが会員となりました。ところが多くの人たちがたくさん佐織縞を作るようになると品質の悪い製品も売られるようになりました。その時、角田市郎兵衛が中心となった柿屋組が佐織縞の改良に取り組みました。柿屋というのは当時流行した佐織縞の柄の名前です。津島の名物に柿屋饅頭という酒饅頭がありますが、この名前も饅頭の色が柿屋の柄に似ていたためとも、柿屋組の名前を後の時代に残すためとも言われています。この饅頭の名は、近江商人として有名な二七翁塚本源三郎が付けました。

ところが、明治２４年（1891）濃尾大震災が起き、明治３０年（1897）大雨により佐屋川が鵜多須（愛西市）で決壊しました。佐織縞を作ってきた工場は、この２つの自然災害により大きな被害を受けました。佐織縞を織ってきた高機も使用できなくなりました。この高機に代わって動力機械による機織りが始まると佐織縞は振るわなくなりました。こうして明治の終わり頃には、海部津島地方では、佐織縞をはじめとした尾張木綿の生産が少なくなっていきました。

（３）片岡春吉と毛織物

天王川公園にある片岡春吉翁銅像

動力機械による機織りが始まると、安い値段の海外の綿を使用するようになりました。明治３０年代には、尾張木綿は大変苦しい状況となりました。その頃、津島の近代工業をになうキーマンの若者があらわれました。大きな夢をもった若者の名前は片岡春吉と言います。

片岡春吉は明治５年（1872)、養老郡多良村（大垣市上石津町）で三輪定右衛門の子として生まれました。尋常小学校卒業後、手織機の部品（竹筬）を作っている店に年限満７年の弟子奉公に出ました。せっせと人一倍働く春吉の働きぶりに感心した津島町の「筬孫」の主人**片岡孫三郎**は、春吉なら店の将来を任せられると思い、明治２５年(1892)、春吉２０歳のときに、一人娘しげと結婚させました。

春吉は家業の筬づくりから脱皮して織物業に挑戦したいと考えていました。そこで、全国の主要織物産地を訪ね歩きました。京都の西陣や群馬の桐生では、できた織物や織機について様々なことを尋ねました。しかし、いまさらこれらの技術を津島にうつすことは難しいと考えました。西陣や桐生の織物がこれから発展する織物業と考えることもできませんでした。こうして春吉は、当時の綿や絹織物に見切りをつけ、毛織物に目をつけたのです。春吉が日清戦争に従軍し、毛織物の軍服に袖を通したことも大きな原因と考えられます。

明治２９年（1896)、春吉は東京モスリン（大東紡織）に見習工として入社しました。毛織物を始めたいという願いをもつ春吉はわずか２年間で、モスリンをつくるための技術と知識を身

につけることができました。一台の手織機をお土産に、津島に帰ってきました。

その後、孫三郎と春吉は店で稼いだ全財産を投入し、さらに借金までして、用地を手に入れ工場を建てました。最初、東京から持ち帰った手織機をもとにモスリンの製造を試みましたが、失敗し、こんどは**セル**に挑戦しました。モスリンもセルも着物用の毛織物で、セルは夏物単衣着物地やはかま用の薄い毛織物でした。

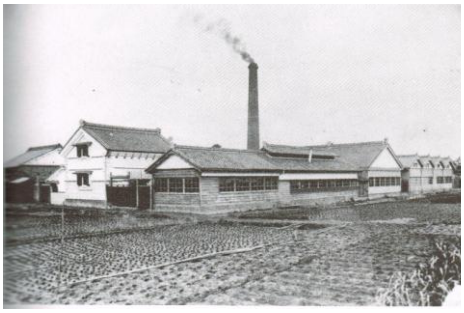
その間、家計は窮乏し、毛織物の材料である毛糸すら必要な数量をまとめて買うことができませんでした。一俵の毛糸を数十回に分けて買い入れ、名古屋まで約２０ｋｍの道を背負って持ち運びました。春吉は研究に片岡家の財産を使い切ってしまいました。

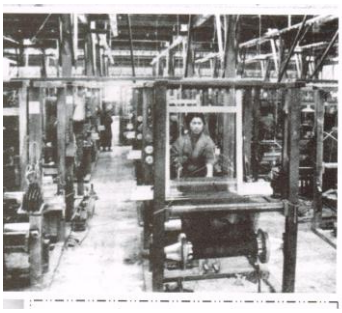
世間の人は冷たく、誰一人春吉に援助の手を差し伸べてくれませんでした。借金取りが来ても払うお金がありません。春吉は食事もろくに取らず、夜が更けるのも忘れて、仕事に夢中になることがしばしばあったそうです。春吉は尾張木綿を織っていた高機を改良し、毛織物用の片岡式二幅織機をつくりあげました。農家の副業として毛織物を織ることができるようにしました。

そんな苦労の末、長年の研究の成果であるセルを次々と博覧会に出展しました。数々の博覧会で春吉の毛織物は大いに

モスリンとブドーセル

研究に夢中となり、米を買うお金さえもなくなりました。





大正時代の片岡毛織と仕事の様子

評価を受け、にわかに脚光をあびることになりました。

しかし、春吉はこれだけでは満足せずさらに上を目指しました。手織機では大量生産ができないという問題がありました。機械を購入しましたが、購入費は莫大で、蓄えた財産をほぼ使い果たしてしまいました。春吉はこの機械を使ってお金を儲けようとは考えておらず、ただ輸入品にも負けない優れた毛織物を自らの手で作り出したいと思うだけでした。輸入織機の全部品が届きました。組み立ては自分たちで行わなければいけません。組み立ての説明書はドイツ語や英語で書かれています。春吉は自ら陣頭指揮に立ち、時間を忘れて機械の組み立てや据えつけをしました。機械部品の一つ一つをていねいに点検し、不具合のある部品には改良を重ねました。

明治４２年(1909)９月すべての織機の設置が完了します。のちに、イギリスの機械技術者が見学に訪れた時、機械の専門家がいない春吉の工場で、織機が少しの狂いもなく組み立てられ、運転していることに感嘆の声をあげたそうです。明治４４年には手織機１６０台、動力織機２０台を備え、生産力は飛躍的に増大しました。春吉が２５才で毛織物をはじめ、寝る間も惜しんで研究した成果が、縞セルを大量生産できる体制として出来上がりました。片岡の名は日本中に知れ渡り、片岡の毛織物は、国内のみならず海外にも輸出されるようになります。

春吉の成功を見て、尾張西部の綿織物業の人たちは縞セルの生産を行うようになりました。毛織物を仕上げる染色整理を研究していた墨清太郎により艶金がつくられ、この地方だけで毛織物製品が完成品として仕上げられることになりました。また一宮の木全角次郎はドイツから毛織物機械を買い入れ、大量生産ができる体制を整えました。

日露戦争(1904 年)が始まり軍事用の服地の需要が増えると、生産量もそれにつれて増加し、第一次世界大戦で織物輸入が途絶えると、国産品が愛用され、尾張地方はその特産地としての名声を得ました。

この頃は「時計の振子がひと振りするごとに１０円（現在の１万円）もうかる」と言われるほどでした。片岡毛織の工場に動力織機が導入されると撚糸（糸をねじりあわせて強くする）や染色についても同じ工場で一貫して行うことができるようになりました。この地方では毛織物産業が急速に発展しました。

春吉のすばらしいところは、自ら苦心し研究した成果を独り占めすることなく尋ねてくる人にはその技術のすべてを惜しむことなく教えたところです。工場の設計・染色・整理の技術からお金の準備の方法にいたるまで懇切丁寧に教えました。そのおかげで津島をはじめ尾張西部地方は、有数の毛織物産業地帯として発展しました。このような地域への献身によって春吉は、「**毛織物界の父**」と呼ばれるようになったのです。明治４３年

工場での春吉

春吉の肖像

尾西地方が「毛織物王国」となったのは大正６年(1917)。毛織物が綿織物の生産額を抜き、全国の繊維業の中心となりました。

毛織物工場の女性従業員の１日の食事。朝食は米・みそ汁とこうこ（たくわん）２切。昼食は米・おから・こんにゃく。夕食は米・野菜・魚・豆腐・油あげでした。

(1910)、春吉は豊田式織機を発明した豊田左吉とともに実業功労者として天皇陛下から表彰されました。

毛織物工場では女性の従業員がたくさんいました。女工・機織り・織り子・バタン子と呼ばれ、津島の町は若い女の人たちでいっぱいになりました。１日の労働は、朝の６時から夜は８時まで。昼食と夕食時間のほか午後３時に休憩がありました。休日は１ヶ月に２回と決まっていましたが、今日に比べると厳しい条件で働いていました。

大正 8 年（1919)、春吉は三重県に広い土地を買い、羊の牧場をつくる計画を立てました。残念ながら羊を飼うには水が少なく、牧草を育てることができませんでした。春吉は原毛から織物までの一貫した生産を願っていました。新たな仕事にチャレンジすることを忘れませんでした。

大正９年(1920)になると、第一次世界大戦のあとの戦後恐慌（景気が悪くなること）が起きました。第一次世界大戦中、ロシアからの軍服の注文で調子の良かった毛織物も輸出が３分の１以下に減ってしまいました。そのため小さな会社はつぶれてしまいました。津島の毛織物工場も破産が続きました。春吉はこの苦しみの中、お金を用意して数多くの工場を救いました。津島のほとんどの毛織物工場は、この時春吉からなんらかの

援助を受けたと言われています。春吉は、毛糸を紡ぐ部門のために準備していたお金を使い切りました。念願であった紡績部門への進出をあきらめることになりました。

春吉は毛織物を盛んにするため、尾西地方に他の会社と協力して、尾西毛織・津島織布・内外紡績・津島染色整理などの会社をおこし、社長や役員となり活躍しました。大正１１年（1922)には、津島信用組合をつくり初代組合長となりました。

大正１３年（1924）２月１０日片岡春吉は５２歳の若さで突然なくなりました。腸チフスだったとも風邪をこじらせたとも言われています。津島の成信坊で行われた告別式では、降りしきる雪の中でしたが、その死をいたみ 3000 名をこえる長蛇の列が続いたそうです。彼の一生を振り返ると片時の休みもなく、毛織物のために働き通しの一生であったと思われます。

昭和１１年（1936）津島の毛織物業界は、「毛織物の父」片岡春吉の功績を永久に称えようと顕彰碑を天王川公園に建立しました。第二次世界大戦の時、銅像は武器に加工され、姿を消しましたが、昭和２８年（1953）に再びつくられ現在にいたっています。

春吉の死後、サラリーマンの服装は着物から洋服へと変化しました。また戦争のため毛織物を利用した軍服が必要となりました。この地域に日本毛織・大東紡績など大きな会社が進出したこともあり、津島から尾西・一宮は、国内毛織物生産の五割以上を生産しました。まさに日本の毛織物王国となっていきました。

津島には片岡毛織のほか、横井毛織・浅長毛織・児玉毛織・寺田毛織など１００名を超える従業員が働く工場がありました。

昭和時代の片岡毛織と織物工場

第二次世界大戦で毛織物は大きな打撃（だげき）を受けましたが、戦後の衣料不足により立ち直り、「ガチャ万」（ガチャンと織れば万のお金が手に入る）と言われる全盛期を迎えました。津島の各工場には若い女性の集団就職（しゅうだんしゅうしょく）により活気にあふれました。昭和４０年代まで「ウールの津島」として全国にその名をとどろかせました。しかし、日本の国の経済成長などにより円高が進み、安い海外の衣料が輸入されました。また若い人たちのウール地離れもあって、尾西地方の毛織物王国は低迷しています。かつて街のどこでも見かけたノコギリ屋根の織物工場は姿を消していきました。織物を染める匂（にお）いもいつしか街角（まちかど）からなくなりました。あれだけ若い女性工員であふれた津島駅前の天王通りも、シャッターの降りる店が多くなってしまいました。

平成１８年（2006）、片岡毛織が繊維業（せんいぎょう）から撤退（てったい）しました。ちょうど春吉がドイツから機械を取り寄せて百年の月日が流れていました。春吉のお陰で津島は毛織物の街として百年の繁栄（はんえい）を築きました。次世代、津島の街を再び甦（よみがえ）らせる「片岡春吉」はもう生まれているのでしょうか。

津島毛織工業組合（つしまけおりこうぎょうくみあい）・ウール会館（かいかん）があり、
毛織物王国の歴史を残しています。

コラム７　放課があるのは愛知県だけ？

明治の校則簿

授業と授業の間の時間を「休み時間」「休憩時間」「〇〇分休憩」と言います。愛知県の学校では「放課」、お昼の長い放課を「昼放課」と言います。１日の授業が終わった後を全国的に「放課後」と言いますが、休憩時間を「放課」と呼んでいるのは愛知県だけのようです。愛知県以外で学校生活を送った人から「放課ってどんな時間？」と質問をいただきます。この言葉について時々「愛知県の不思議」として取り上げられますが、調べてみるとおもしろいことがわかりました。

「放課」という言葉が初めて使われたのは明治６年(1873)の『愛知県義校規則』です。「毎日午前１０時より１１時まで　午後１２時より午後１時までの両度を放課とする」と決められました。さらに明治１５年(1882)の『愛知県小学教則』では「授業の合間を放課とし」、「１０分間の放課を与える」と決められました。こうして愛知県では休み時間のことを放課と呼ぶようになりました。

もともと「放課」とは「課業」（学習・授業・科目）を放つという意味です。学習や授業が行われない時間ということになるのでしょうか。「休み時間」は休むことを大切にした言葉ですが、「放課」は授業の合間であり、授業を行うことを大切にした言葉と言えるかもしれません。

愛知県のお隣の岐阜県・三重県・静岡県・長野県では「放課」と言う言葉が明治時代の条例で決められることはありませんでした。こうして愛知県だけが休み時間のことを「放課」と呼ぶようになりました。

コラム８　津島は相撲のまち？弓道のまち？

愛知県で国民体育大会が開催されたのは二度。昭和２５年（1950）の第５回「愛知国体」と平成６年（1994）の第４９回「わかしゃち国体」です。第５回の愛知国体では当時天王川公園にあった津島市相撲場を会場として相撲大会が、また第４９回のわかしゃち国体では錬成館弓道場を会場とした弓道大会が開催されました。

第５回「愛知国体」では文部省が主催者に加わり、開催県の愛知県は後援にまわりました。大会旗リレーは東京都千代田区から名古屋市までを総勢 4,000 人でリレーしました。この大会から初めて炬火が点火されることとなりました。津島市では天王川公園の真ん中にあった市相撲場（現在の天王川公園時計塔・植え込みの辺り）で開催されました。

第４９回「わかしゃち国体」では、スローガンを「いい汗キャッチ！生き生き愛知」、大会マスコットは「シャッチー」。同時に行われた全国身体障害者スポーツ大会は「ゆめぴっく愛知」と呼ばれました。津島市では真新しく開館したばかりの津島市錬成館弓道場で弓道大会が開催されました。「今、津島は弓の香」がキャッチフレーズとなりました。

津島市の特色としてこの２つのスポーツが大変盛んとなっています。平成２５年で、第３６回学童相撲大会や第３４回錬成大会（剣道・柔道・弓道・相撲）第１９回わかしゃち国体記念遠的弓道大会、第３８回津島神社奉納武道大会などが続いて行われています。大相撲名古屋場所で「大鵬部屋」が長く津島に逗留したことも相撲熱を高めました。現在も津島の子どもたちは一度は相撲や弓道などの武道を経験し、成長しています。

コラム９　「信長めし」「うつけもの」「津島ジンジャー」「海部津島ビール」って？

津島には、織田信長が深く信仰した津島神社や、５００年以上の歴史をもつ尾張津島天王祭などかあります。ところが郷土料理やグルメが少ないようです。そこで、津島商工会議所が中心となって「信長めし開発プロジェクト」が誕生しました。歴史や食文化を生かし、この地にゆかりのある織田信長にちなんだ料理が「信長めし」です。

「あかだ・くつわ」「重箱うどん」のような津島名物を目指してつくられたのが「うつけもの」(ごずみそと青瓜を使ったお漬物)「津島生姜（ジンジャー)」(瓜と生姜と昆布と唐辛子によるお漬物　パスタや炒飯の味と合います)「津島生姜カレー」（津島生姜と名古屋コーチン、ごずみそを加えた大人の辛口カレー）です。ごずみそとは津島神社に奉納される味噌のことです。

海部津島（かいぶつじま）ビールと呼ぶそうです。津島に誕生した地ビールです。もともと海部地区は水が豊かで、日本酒が数多く造られてきました。鶴見酒造がつくったコクとキレのある地元のビールです。

津島生姜

津島生姜カレー

海部津島ビール